

イメージしてください。

教科書のいう「3原色」では足りない色がある。

もしも、ノーベル写真学賞というものがあつたら、
いただけたかも知れないのに。



いやいや、ノーベル賞にはちょっと届かないにしても(笑)。それは、ひとびとの常識をひっくり返すようなお話です。カラー写真の原理といえば、理科の授業で習った「光の3原色」を思い出すでしょう。事実そうでした。赤(R) 緑(G) 青紫(B)の3つの色に分解して記録する。カラー写真のフィルムは「3原色があればすべての色はつくれる」という原理が前提でした。なのに「すべてではなかった」って、どういうこと?

いまから300年も前に、かのニュートンはこう指摘しています。「光そのものに色がついているわけではない」。ニュートンは太陽の光をプリズムによって分散させ、光の色と波長との関係を見つめました。それは、いわば物理的な色です。ニュートンが言いたかったのは、人間が見ている色とは、光の刺激によって生じる感覚、つまり主観的なものだ、ということなのでしょう。これを、知覚的な色と呼びます。知覚的な色と物理的な色との関係は単純には対応していません。そこに、カラー写真にとって残された難題がありました。その「むずかしさ」を専門的にひとことというなら「知覚的な色の特性をRGBの3原色の関数で表すと、赤のマイナス部分が存在する」ということ(・・・!?)。それは、世紀の宿題でした。

この、物理的に作りだす色と人間が知覚する色の違い、「赤のマイナス部分」が、カラーフィルムの色の再現性に限界があることの言い訳とされてきました。3原色を原理とする従来のカラーフィルムでは再現の困難な領域があるのです。そんなカラーフィルムの原理と歴史を塗り替えたのが、フジフィルムの開発した「第4の感色層」です。いわば、人間の知覚がしていることをフィルム自体にさせる。「赤のマイナス部分」を補正する「シアン(CL)感色層」が、その役割をみごとに果たします。100年の歴史を経てようやく、物理の原理から人間の原理のカラーフィルムへと進化を遂げたのです。むずかしい話はこれくらいにして、「第4の感色層」をもつフジカラーフィルムの真価は、どうぞあなた自身の目でお確かめください。フジカラーはもう、言い訳などしません。あなたが感じたままの美しさを、その色を、そのimageを、フジカラーは鮮やかに再現します。

国境やことばを越えたコミュニケーション。それが、image。人間の知的精神的活動が発達するかぎり、imageの創造と蓄積は加速度的に拡大しつづけるでしょう。私たちは過去に例のない質と量と速度の「imageの世紀」を、すでに迎えています。光学、化学、電子工学から人間を知る認知科学の領域まで。「imageを科学する」世界的フロンティアとして、フジフィルムは21世紀のメインストリートを進みます。



VOL.
第4の感色層
FUJIFILM
I&I-Imaging & Information
www.fujifilm.co.jp

imageする会社。FUJIFILM